

大好きな

年上幼馴染は

絶倫

でした

、初めてなのに

あまあま溺愛えっちで

本気イキしちゃう話



「飲んだ、お酒美味しかった！今日は二十歳のお祝いありがとう！」

夜のひんやりとした空気が、火照った頬に心地よい。

隣を歩く新（あらた）くんをこっそりと見上げる。

（……本当に、新しくってかつこいいなあ。）

綺麗な二重と整った顔立ち。少し茶色い短髪がよく似合う新くんは、昔から注目の的だった。上京してからはモデルにスカウトされることもあったらしいけど、私にとっては、かつて家が隣同士の、頼れる年上の幼馴染だ。

先に上京した彼を追って、私も東京の大学へ進学した今でも、たまに二人で食事に行く仲だ。

かつての身長差はわずかなものだったのに、今では大きく見上げないといけなくなった。その広い背中を見るたびに、幼馴染という心地よい関係に甘えながらも、それ以上の何かを期待してしまう自分がいた。

「……きやつ」

そんなことを考えていると、不意にふらりと足がもつれてしまった。

「…危ない！」

低い声と同時に、逞しい腕が私の肩をぐいつと強引に引き寄せた。

私の顔は、新くんの広い胸板に深く押し付けられる。彼の服からふわつと香るほのかな柔軟剤と、大きくて熱い手の温もり。彼に他意はないとしても、これは心臓に悪すぎる。

2

「ちゃんと前見て歩けよ」

「あ、ありがとう……」

いつもより近く、低く響く彼の声に、否応なく心臓が暴れ出す。

（……ダメだよ、こんなの）

彼に他意はないと分かっているからこそ、私だけが期待しているみたいで苦しくなる。

心臓の音がうるさすぎて、新しくの腕の中から逃れようとした時だった。

「……陽毬」

ぞくり、と本能的な何かが背筋を駆け抜けていくような気がした。

耳元で響く、ひどく、低い声。私はその声に捉えられるように、動けなくなってしまうた。

恐る恐る新しくの顔を見上げると——街灯の光のせいだろうか。

いつもは柔らかいその瞳が、ギラリと、何かを訴えかけるかのように、熱く昏く、私を見つめていることに気づく。

もう一度、肩をぐつと引き寄せられる。

「……新、くん……？」

私を射抜くようなその視線に、目を逸らそうとしたけど、なぜか動けない。永遠にも似た刹那、私たちは見つめ合っていたような気がする。

新くんは何かを言いかけて飲み込むように、ゆつくりと、私の唇にまで視線を滑らせた。

「……まだ飲み足りないんだけど、付き合ってくれるか？ ……俺の家で」
大学生になったばかりの頃、新くんに言われた気がする。男の部屋には気軽に入るなよって。

（…気軽じゃないなら、いいのかな）

好きな男性の家になら、行ってもいいだろうか。このまま離れたくないという自分の気持ちに従ってもいいだろうか。

「……陽毬、返事は？」

じれたような、ねだるような、掠れた甘い声に、くらくらする。こんな彼を、私は知らない。

「…………私も、飲み足りない」

小さく呟くので精一杯だった。

新くんは満足したように口角をあげると、肩にいていた手を滑らせて

——気づいた時には、熱い手のひらで私の指を絡め取っていた。

（新くんの手、こんなに大きかったんだ……）

新くんの長い指が、私の指の間へ強引に割り込んでくる。節の目立つゴツゴツとした感触が肌を擦り、私の手をすっぽりと包み込んでしまう。

逃がさないと言わんばかりに力強く絡められた指先が、熱くて。頭がどうにかなりそうだった。

繋いだ手の熱に引きずられるようにして、私は夜の奥へと導かれていく。



ガチャリ、と新くんが家のドアを開ける。静かな夜のマンションに、鍵の
開く音がやけに重く響いた。

新くんの後に続いて、暗い部屋に足を踏み入れる。

ふわり、と。シトラスの清涼感ある瑞々しい香りが鼻をくすぐった。

前に遊びに来た時と、同じ香りのはずなのに、今夜はその香りが妙に濃く
感じられる。私自身の神経が研ぎ澄まされているからだろうか。爽やかだっ
たはずのその香りが、今は私の心を甘く乱す、優しい檻のように感じられ
た。

そんな、いつもとは違う、夜の昏く濃密な空気から逃れるように、私は新
くんに問いかける。

「ね、ねえ、電気は……っ、えっ？」

問いかけと同時に、私の体は、大きな体に包み込まれ、視界が彼の胸元で
塞がれていた。

新くんは、私の肩口に顔を寄せた。頬を掠める柔らかな髪感触、首筋に触れる熱い吐息。

突然の出来事に、頭が真っ白になる。

「陽毬……」

彼は熱っぽい掠れた声で私の名前を呼び、そのまま、首筋にちゅう、と唇を押し当てた。

「……んっ」

首筋から伝わる熱に、背筋がぞくぞくと粟立ち、私のものじやないみたいな甘い声がひとりでに漏れる。

（え、え、首筋……、新くんに、キスされてる……？）

首筋に押し当てられた熱い唇は、ちゅう、ちゅっ♡ と肌をなぞるようにゆつくりと上に這い上がってくる。

「ふっ……んう……、あ……」

そのまま耳たぶを優しく喰まれ、体全体がビクツと跳ねる。

「あ……っ♡」

「かーわい……、耳少し噛んだだけでこんなに反応すんの？ ……もしかして、耳弱い？」

ふー……っ♡ と耳の中に息を吹きかけられ、またしてもびくびく♡ と腰が跳ねる。

「ん……っ、あ……うん……。そ、そこでしゃべらないで……っ。ふっ……う♡」

知らない快感が押し寄せてくるのが、なんだか恐ろしくて、私を抱きしめ続ける新くんの胸を押し返そうとするが、どうも力が入らない。

耳のふちを、つくく……♡ と舌先でなぞるように舐められる。下腹部の奥がきゆう♡ と疼き、逃げようのない快樂がじわじわと溜まっていく。

「……う……ふっ、ん……っ♡ はっ……、んう……♡」

「まだ耳だけなのに、ビクビク止まんないな？」

「んっ♡ ……っあ！？ 反対の耳もっ、だ、だめっ♡」

同じように、反対側の耳も彼の熱に侵される。耳の縁を舌でなぞるだけでは飽き足らないのか、熱い舌がぬるり♡ と耳の穴を塞ぐように入りこむ。

「あ、あ♡ それっ、ぞわぞわしちゃうから……あっ♡ や、や……あ、あっ♡」

（新くんの舌っ♡ 耳の中、ぐちゅぐちゅってかき回されてるっ♡ 頭、へんになりそ……っ♡）

耳の奥から全身を駆け抜けるような生々しい水音に、理性が溶かされていく。もう体に力が入らなくて、自然と新くんに寄りかかってしまう。

「可愛い声出しちゃって…。もう立つてるのも限界だな？」

ガクグク♡ と震えることしかできない私の耳元で響く、彼の意地悪く、低く甘い声。腰に回されていた腕にぐいと力がこもる。

彼にされるがまま、体がふわつと宙に浮いた。気づいた時には、柔らかなソファに体を押し当てられている。

「あ、新しく……っ、んう……!?♡」

柔らかくて、熱い。

問いかけようとした唇はすぐに塞がれた。逃げ場を奪うようにソファへと私を押し込み、上から覆い被さるようにして、口付けられていた。

（キ、キスされてる……っ？ 新くんの唇、あつつい……、やわらか……

♡）

いつも私に笑いかけてくれていた、形の良い唇が、今は自分の唇に触れているなんて、なんだか現実感がなかった。

初めての感触に溺れそうになっていると、早く口を開けろと言わんばかりに、唇をつつ……っ♡ となぞられる。

背筋がぞわり♡　として、はっ……と息を吐き出すと、その瞬間を見逃さないともいうように、すぐに、ぬるり♡　と熱い舌が入り込んできた。

ちゅう♡　ちゅく、ちゅく♡　ちゅぷ♡

「や、ふ、あつ♡　……ん、う……♡　ふっ、や……あ、……んう♡」

（キスつてこんなに気持ちいいの……？♡　新くん、新くん……♡　あた
ま、とけちやいそ……♡）

初めての感覚に、頭も下腹部もじいん♡　と疼いて、縋り付くように新くんの服をそのまま掴む。

気持ちよくて思わず逃げようとする私の舌を、逃さないとばかりに掬い上げられ、絡め取られる。そのまま舌の裏側の敏感な部分をじゅぽじゅぽ♡と吸い上げられ、腰の力が抜ける。

「キス気持ちいいなあ？　これからもずっと気持ちいいことするからな」

キスに夢中になると、いつの間にか新くんの大きな手が服の中に入り込んできた。

彼の手はそのまま、私の膨らみのてっぺんまで辿り着くと、——そのまま、すり♡と指で擦りあげた。

「あっ♡、そこ、だめ♡」

キスされながら、すり、すり♡と乳首を優しく指の腹で擦られて、知らなかった快楽が身体中を駆け巡る。

「やらしー……、すりすり触ってるだけで乳首ぷっくりしてきた……」

キスの間に低い声で囁かれて、指先でトントン♡と乳首のてっぺんを突かれる。

(恥ずかしいこと言わないでっ♡ 乳首、気持ちよくなっちゃう♡ あっ♡ 指先でこねこねするのダメっ♡♡ ゾワゾワきちゃうう♡♡)

クリ♡ クリクリ♡ ピンッ♡ ピンッ♡

「あ、……んう♡ ふう、んっ♡ あ♡ ……うあ♡」

絶え間なく与えられる刺激に反応するようにピンと立ち上がった乳首を、こねくり回されて、時折ピンと弾かれる。

「こーうやつてピン、ピン♡ つて弾くたびに腰、揺れてる……。おっぱいも敏感なのか？」

「んう……♡ い、言っちゃ、あ……っ♡ やあ、だ……っ♡」

自分の意志とは裏腹に、快感に突き動かされた腰が自然とビク、ビク♡と浮き上がる。そのたびに、私の股の間に差し込まれている新くんの逞しい太ももに、クリトリスが擦れてしまう。

「ん♡ んっ、ふ、うん♡ ……あ、ふっ♡」

自ら快感を求めるような淫らな動きをしてしまったことに、頭がどうにかなりそうだった。

「自分で気持ちいいところ当ててんの……？　陽毬はいつからそんなにえつちになったんだ？　ん……？」

ぐりい♡　ぐり……ぐり……♡

「あっ♡　……♡　……あぁっ♡　んうっ……♡」

感じていることをなじられるように、でも私をさらに高みへと押し上げるように、新くんの膝が私のクリトリスを布越しに容赦なく決る。

もどかしくて、けれど自分で擦り付けた時よりもずっと鋭い快感が、脳を直接揺さぶる。胸への刺激と、クリトリスの刺激が混ざり合って、頭が真っ白になっていく。

（新くんの硬い膝で♡　クリトリスぐりぐりされてる……♡　おっぱいも……乳首コリコリも気持ちいい♡）

ぐり♡　ぐり♡　にちゅっ♡　ぬちゅっ……♡

新くんの膝が動くのに合わせて、にちゆり♡ と愛液のいやらしい音が響いてくる。ショーツ越しに触れられているだけのはずなのに、私のそこはもうすでに溢れ出した蜜でぐっしり濡れてしまっている。

恥ずかしくて、涙目になりながら私を見下す新くんをちらりと見る。

そこにいるのは、私の羞恥も戸惑いもすべて踏みにじり、一人の「男」として私を責め立て、貪り尽くそうとする、重く昏い、欲望に濡れた瞳をした新くんだった。

「……なあ陽毬、わかる？ おまんこ、膝当ててるだけなのに……。もう、ぐちゅっ♡ って音してるの。俺のズボン、陽毬のえっちな汁でぐしょぐしょになってるんだぞ……。？」

「……んあっ♡ 恥ずかし……。♡ い、言わないで……。え、んんっ♡ あっ、ああ……。っ♡」

ぐちゆり♡ にちゅ♡ にちゅっ♡

私の反応を楽しむように、涙目になった私を見下ろしながら、新くんは私に快楽を与え続ける。

いつもとは全く違う、熱に浮かされた瞳で見つめられて、ゾクゾク♡とした背徳感が背筋を甘く痺れさせる。

「……んっ……うっ♡　んっ……っ♡　ふっ、……は、あ♡」

（気持ちいいっ、けど♡　少し焦った♡　クリトリス、もつといじめてほしい……♡）

「腰さつきよりへこへこ揺れてるな……？　気持ちいいけど、足りなくなってきた？　布越しじゃ切ないよなあ……？」

思っていたことを言い当てられてしまつて、嬉しいやら恥ずかしいやらで、この先の展開を期待するみたいに子宮がきゅん♡　と疼く。

「……っ……んあ♡　っふ、……っあ……んっ……♡　そ、そんなこと、な……っ」

「まあ、俺がもう我慢できないんだけどさ♡ ほら、陽毬のえつちな格好見てたらこんなになっちゃったんだけど……？」

私の強がりやを封じ込めるように言葉を被せた新くんの手が、自身のベルトに掛かった。

静かな部屋に、カチャリ、と硬質な金属音が響く。

慣れた手つきでストラックスを押し下げた新くんが、私の手をそつと掴み、自身の熱へと導く。

恐る恐る、触れてみる。薄い下着越しでもわかる、怒張した熱い塊。

（お、おつきくない!? あ、あつついし……♡ なんかくどくどくしてる……♡♡）

今まで男性のおちんちんに触れたことはなかったけど、きっと新くんのものが大きい方であろうことはなんとなくわかる。パンツの中に窮屈そうに収

まっている、大きくて熱い塊を前にして、新くんも私で興奮してくれているんだ、なんてことを頭の隅で考える。

「部屋で飲もうなんていう男の言葉、どうして真に受けたんだ？　こういうことになるってわからなかった……？」

新くんの手は、私の手を掴んだまま。彼の手の動きに導かれるまま、おちんちんの形を確かめるように、上下にすり♡　すり♡　と擦ると、彼からは、く……っ♡　と熱く甘い息が漏れる。

「そっ、それは……。新くんになら、……。その。い、いいと思って……」

私のその発言に、おちんちんがずくん♡　と脈動するのを感じる。

「はあ……。マジで可愛すぎる……。♡　じゃあ、もっと気持ちよくなろうな？」

ちゅう♡　と唇に一つキスを落とすと、新くんは慣れた手つきで私のブラウスのボタンに手をかけ、ぷち、ぷちり♡　と一つずつ外していく。

（あ、ああ……♡ 脱がされちゃう……♡ 本当に今日、新くんといつちしちゃうんだ……♡）

ブラジャーのホックを外され、ぷるん♡とおっぱいがあらわになる。汗ばんだ肌にひんやりとした空気がまとわりついたと思ったら、すぐに新くんの熱い吐息が逃げ場を奪うようにそこを塞いだ。

ぢゅう♡ ぢゅ……♡ ぢゅ……♡

「ひうつ……♡♡ はあつ、……ああ♡ あつ、や、やあ……♡♡」

（急にだめえ♡♡ おっぱい♡♡ 吸われてる♡♡ わたしのおっぱい、吸われてるよお♡♡）

ぢゅう♡♡ と吸い付いて、そのまま柔らかい舌の先が、私の乳首をピン♡ピン♡ と軽く弾く。求めていた快楽が背筋を駆け抜けて、足の指先まで痺れるようだった。

「乳首硬くなってきた……。ぷっくりして可愛い……。もつといじめてほし
 いて言ってるみてえ。反対側もこりこり♡ してやるからな……。♡」

ぢゆるっ♡ ぢゆるるっ♡ れろれろ♡♡ こりこり♡ くりっ♡

吸われて、舌で転がされて。片方のおっぱいは手で乳首を摘まれてこねく
 り回される。

「……。っっ♡ こ、これっ♡ だめ、だめ♡ や、あ……。っっ♡ ふあ、
 あんっ……。♡ ふっ、や……。あっ♡ きもちい……。、ダメえっっ♡♡」

（新くんのべろ、あっつい♡ 乳首こねちゃダメ♡ くりくり、きもちいっ
 ♡♡）

新くんの舌と手の動きに合わせて、びく♡ びくびく♡ と、まるで自分
 の体じゃないみたいに体が跳ねる。

「腰のびくびく止まんないな？ おっぱいそんなに気持ちいい……。？ ……
 だけどこっちも寂しがってる♡」